



『記憶・歴史・忘却』 ポール・リクール

新曜社 上下計1万290円 久米博訳／ロベ・ロベール 哲学者。
1913-2005年。パリ大学、シカゴ大学教授などを経る。

過去なるものをいかに表象するか 失われた「声」をめぐる思索

宮下志朗
東京大学大学院教授

この5月に92歳で死去したフランス思想界の重鎮の名著。20世紀の思想界の巨人には、レヴィナス(90歳)、ガタマー(102歳)など、長寿をまつとうした人物が目立つが、リクールもそうしたひとりだった(まだ健在であるのが、1908年生まれのリヴィーストロー)。リクールは、大著「時間と物語」(新曜社)で、歴史の認識・記述という問題を取り上げた。そこでは、歴史が物語にほかならず語られる過去とは、記憶のなかに、われわれの現在のふるまいが書き込まれるといった意味での過去であることが確認されていた。過去の「生きられた時間」と立ち向かうといっても、現在という時間に立脚して物語を構築するしかないのである。

いかに発していることは疑いない。

狡猾な「忘却の戦略」に抗するべく、「記憶の義務」を果たすこと。それは、償いえないものが必然的に残ってしまうことを認識することでもあるという。したがって必然的に、「赦し」という困難なふるまいの問題が立ち現れることになる。たしかに過ちは深い、だが、それだけ赦しは高い——両者のあいだの懸隔には果てしないものがある。ここで著者は、赦しとは赦しえぬものに向けられるものであるというデリダと立場を共有している。

そして最後には、ネルソン・マンデラの「真実と和解の委員会」への言及がなされて、ニュルンベルクや東京での、あの懲罰的な「裁判」とは対置する形で、苦悩にみちた「赦し」の実践について少しだけ語られる。そこには「汝の敵を愛せ」というイエスの声がこだましているのではないのか。いずれにせよ、真実の「赦し」が、かぎりなく困難な道であることにかわりはない。われわれは善と悪との非対称の関係を、「赦し」によって乗り越えなくてはいけないのだろうか？

その場合、「時間」と「物語」のあいだ

に介在するものとして、「記憶」と「忘却」の問題が不可欠となる。こうして書き継がれたのが本書といえる。表れとしての回想から、探究としての想起をへて、反省された記憶へという道筋が、文字というバルマコン(薬物)は、良薬なのか毒薬なのかという、プラトンの名高い疑問への考察などを差し挟みながら、進められる。こうして、「記憶」と「忘却」とのせめぎあいをくり返しつつ、「歴史」が紡がれていく様相をめぐる、濃密な思考が実践される。例によって、その記述は膨大な学識に裏打ちされており、プラトン、アリストテレス、フッサールから、フーコー(リクールは彼に敗れて、コレ

こうした関係性こそが「正義」なのだろうか？ あまりに重い、問いかけである。本書も最後には「未完」と記されて、次の著作へと引き継がれる。

いやおうなしに負ってしまったトラウマから、人類はいかに自己回復をすべきなのか——こうした問題のキーワードとして浮上する、「赦し」と「忘却」という主題。これは、人類共同体の「癒やし」の可能性を探る試みと呼べるのだろうか。そういえば、わが国の首相が戦争責任論に関連して、「罪を憎んで、人を憎まず」ということわざを持ち出していた。行為

ージュ・ド・フランス入りを逃した、デリダはもとより、マルク・ブロック、ミシェル・ド・セルトー、カルロ・ギンズブルグ、「記憶の場」のピエール・ノラといった学者に至るまで、さまざまな領域の諸賢の英知が大動員される。難解さゆえ「時間と物語」を途中で放棄した評者にとつては、これまた、苛酷な読書となった。正直いって、他者の言説の引用・言及を、もう少し減らしてほしかった。

こうした記述のスタイルは、彼の知的誠実さの証明である半面、創造的な思索者ではなく大読書家にすぎないという、誤解にもとづく評価の一因ともなっている。それにしても、われわれは過去なるものをいかに表象するのか、そうした過去の表象は「忘却」と裏腹な関係にあるけれど、われわれは人間として、いかなる態度で立ち向かうのか？ アーレントが「忘却の穴」と形容したホロコースト問題についても、同様だ。慎重にして賢明な思想家のリクールは、このできごとへの直接的な言及は、極力避けているけれど、本書が、こうした失われた痕跡の「声」をめぐる問

を罪あるものとしながら、罪の主体を憎まないとは、行為の主体とは別の主体を「赦す」ということにはかならない。その場合、やはり、その別の主体は、あくまでも善なる存在として、つまりは悔い改めて自己回復をおこなう力を備えた善なる主体として認識されるようではなくてはいけない。こうしたことまでも考えさせられた。

20世紀という戦争の世紀の抱えた問題を、人間として引き受けつつ思索し続けた哲学者が残した、かけがえのない行動の存在論。②